

高知大学 病院ニュース

〔編集〕

高知大学病院ニュース

編集委員会

委員長 瀬尾 宏美

〔発行人〕

高知大学医学部附属病院

病院長 杉浦 哲朗

病院長就任ご挨拶



杉浦 哲朗

平 成 22 年 4 月 1 日より倉本秋病院長の後任として高知大学医学部附属病院長を担当させていただくことになり、ここに謹んでご挨拶申し上げます。

高 知医科大学は「人間味豊かな良き医師づくり」と「地域医療に密着した学風づくり」を建学の理念として設立され、医師の育成、高度先進医療の提供、医学研究の成果を医療に還元するという 3 つの使命を持っています。附属病院もこれらの理念に基づき昭和 56 年に開院され、急性期の患者さんに全人的医療を提供する病院として歩んでまいりました。倉本前病院長は国立大学の法人化という大きな変革の中、職員の福利厚生に配慮しつつ自己完結型の運営を軌道に乗せ、医療の質と経営の質が両立する病院を築き上げて来られました。このような堅固な土台の上に乗ってスタートできることは、私にとって幸せであると共に倉本前病院長の 6 年半の歩みに敬意を表す次第です。

私 は、平成 11 年 4 月より高知医科大学臨床検査医学講座及び附属病院検査部・輸血部を担当させていただいております。平成 11 年は 20 世紀も残り 2 年となり高知医科大学および附属病院を取り巻く環境は目まぐるしく変化しておりまさに時代の転換期にありました。医療は経済的にも社会的にも厳しい環境の中にあり、臨床検査部門も経済的制約の中で、これまで以上にコスト意識を持ち検査業務を行わなければならない状況でした。そのため臨床検査では科学的水準を維持しながら検査業務を省力化、効率化することが要求されていました。このような臨床検査が置かれている状況を踏まえ、私達は「機能を充実した検査部」「外部評価機関により質を保証された検査部」の構築に努めてまいりました。今後は検査部での経験を生かし、患者さんや地域の医療機関にとって常に「安心して任せられる病院」であることを目指して行きたいと思っております。

平 成 22 年度からの附属病院の中期目標として「社会ニーズに呼応した病院機能運営を強化する」「先端医療の確立と研究成果の医療現場へのフィードバックを充実し、パートナーシップに基づく地域医療を実践する」および「教育・研修における医学から医療学へのパラダイムシフトに対応する」の 3 点が掲げられています。急性期の患者さんを扱う総合病院であると共に県内唯一の医育機関である私たちの病院の使命は、最高水準の全人的医療を提供するとともに専門的知識のみならず総合的視野を持ち医療現場でのコミュニケーション能力を発揮できる医療人を養成すること、そして未来の医療に貢献しうる真実を探究し、さらなる高度先進医療を提供していくことだと考えております。

大 学が法人化して 6 年が経とうとしています。職員の皆様には自立・自律の精神が浸透しそれぞれの立場で患者さんの **care** と **cure** に尽くしておられると思います。11 年前、検査部の壁に「**They say no, You say no. But we have to do something.**」と書かれた額が掲示されていました。高知には伝統的に「私が動かしている。私が役に立っている。」という気風が整っていたものと推察されます。平成 23 年度からは病院再開発も始まる事が予測されます。今後はますます職員の皆様が「自立と自律」を継続し医学部附属病院の発展に取り組んでいただくことを願っております。地域に密着した中核病院として医師・看護師・メディカル・事務職等のそれぞれがプロ意識を持ち、お互いに情報を共有し連携しながら医療の質と安全の確保に努めると共に、地域の病院や医院との医療ネットワークの充実を図って行きたいと考えております。職員の皆様には今後共変わらぬご支援・御協力を賜ります様、心からお願い申し上げます。

卒後臨床研修体験記



渡邊 理史

「衝撃」。初期研修が始まったときに感じた最もふさわしい言葉ではないかと思います。学生時代、ひとつ上の先輩として仲良くお酒を酌み交わしていた人たちが、今度はひとつ上の医師として仕事をしています。何もかもが「すごい」の一言。1年間の差とはこんなにも違うものなのか。圧倒されて初期研修をスタートしたことを鮮明に覚えています。はたして今の自分がこの「衝撃」を後輩に与えられるような医師に成長できたかわかりません。

光陰矢の如しとはまさにこのこと。気づけば2年過ぎたという感じです。初めは、一人の医師として、何でもできるようになりたいとの思いから、何もかも一人で解決しようとしている自分がおり、焦る気持ちばかりで、無理がたたり体調を崩したこともありましたが、一人ではなかったこと。これが2年間充実して送ることができた最も大きなことだと感じています。多くの仲間や支えてくれる人が身近にいたこと。感謝しきれないくらいです。

最初の研修先で言われたことは今でも印象に残っています。「笑顔」です。練習しろとまで言われました。こわばった顔だったのでしょうか。頭ではわかっている、時間に追われ、自分に余裕がなくなったときは流れ作業のように仕事をしていた自分がおり、笑顔どころではなかったと思います。また、仕事にも慣れ中途半端な自信が出だし、いろいろなことに対しおろそかになっている部分もあったと思います。そういう時に、患者さんやスタッフの方の笑顔を見るたびに、頭が下がる気持ちでいっぱいでした。これからは笑顔を提供する側になりたいと思っています。

今でも、先輩方のようにできているかわかりませんが、常に目標となる人が目の前にいることは幸せです。大学病院を選択したことは間違っていなかったと思います。4月からは新たな道へと進んでいきますが、医師としてのスタートを高知大学医学部附属病院で迎えられたことを誇りに思っています。



荒川 悠

卒後臨床研修を終えるにあたって。

皆さん、こんにちは。高知大学附属病院初期臨床研修医の荒川悠と申します。この度無事に初期臨床研修を終えることができました。つたない診療におつきあいいただいた患者様方や、私をここまで育てていただいた、先生方、コ・メディカルスタッフの皆さんには感謝してもしきれない気持ちで一杯です。長いようで短い2年間でしたが、2年間の研修を振り返って感じるのは、様々な病院、診療科をローテートすることができて、本当によかったということです。その病院、その科に行かなければ見えなかったことがたくさんありました。高知大学の臨床研修は高知大学病院の他、県内の大病院や地域の公立病院など県内の主要な医療機関をローテートできるのが特徴です。内科医の視点、外科医の視点が異なるのは当然ですが、同じ科でも施設が違えば流儀も違う。戸惑うこともたくさんありましたが、広い視点で高知県全体の医療事情をみることができるようになりました。各施設の良いところ、悪いところも見ることができ、さらにそこの患者さんや職員から大学病院にいただけでは知ることが無かったであろう当院に対する不満や希望を知ることができたのは、これから大学病院で働くに当たってとても大きな財産になると思います。どこからも100%の評価を得られる病院など存在しません。しかしできるだけ患者さんもスタッフもそして連携している病院も満足できるようにすることが病院で働く、すべての職員の役割と思っています。偉そうなことを書きましたが私もまだまだ未熟な状態です。謙虚な姿勢を忘れず、日々精進していきたいと思っています。

「がん治療センターの活動」

がん治療センター部長：小林 道也

当 院は平成 19 年 8 月 24 日に都道府県がん診療連携拠点病院に指定され、がん治療センターが設置されました。当初は外来化学療法室、緩和ケアチーム、地域医療連携室などががん治療センターに少しだけ足を突っ込み、半分以上はセンター外の組織でした。“コンクリート”も人もなく、この 2 年半もがき苦しんできた結果、少しずつ組織作りをし、新たな取り組みをしてまいりました。2007 年 118 号の病院ニュースのなかの「こはすくん」25 号に当時のことを書かせていただいております。そのときの文章では 1) がんプロが始まったこと、2) 各科横断的ながんのカンファレンスを開催したいこと、3) 臨床治験を行うこと、4) 高知県をはじめとする行政や患者会などのかかわり、についてご紹介しています。

が ん治療センターとして多くの改革、取り組みをしてまいりましたので、その一部を紹介させていただきます。まず院内に向けてはがん治療センターの組織を見直し、外来化学療法室と緩和ケアチームをがん治療センター内の部門といたしました。これにより少しでも現場で働いていただいているスタッフの方々の「根っこ」がしっかりすればと思っています。さらに 2009 年 1 月からは毎月定期的に院内全体のキャンサーボードを開催しています。毎回 40 人から 80 人の病院スタッフに参加していただいています。当院のキャンサーボードではスターボックスのコーヒーとクッキーが提供されていますのでぜひ休憩がてら参加してください。以前の症例を検討する形式から本来のキャンサーボードの機能である現在進行形の症例を他職種で検討する会にすべく努力していただいているところです。

都 道府県がん診療連携拠点病院としては高知県全体のがん診療についても考えていかなければなりま

せん。平成 22 年 4 月 1 日の診療報酬制度改定で新たながん治療連携計画策定料が算定できるようになります。がん治療センターではこれに先立ち、高知県と高知県がん診療連携協議会(都道府県がん診療連携拠点病院である高知大学医学部附属病院が設置)の共同で高知県全体のがん地域連携パスを作成しています。具体的には昨年 2 月に地域連携パス作成委員会を立ち上げ、その後、5 大がん(肺・乳腺・胃・大腸・肝)に加えて婦人科がん、前立腺がん、計 7 がん種のパスを作成いたしました。さらに緩和ケアのパスも高知県と高知県在宅緩和ケア推進連絡協議会とともに作成しています。これらはがん治療センターホームページだけでなく、高知県や地域がん診療連携拠点病院のホームページにも載せていただくお願いをしております。さらに半年毎に新たなパスを作成していく予定です。ぜひ、ご活用いただければと思います。

も ちろんこれらの新しいことだけでなく、従来のがん化学療法レジメン審査・登録業務も順調に行っております。さらに診療情報管理室の充実により院内がん登録業務が進み、これまで高知県医師会が高知県の委託業務として行ってきた地域がん登録につきましても平成 21 年度から本学がお引き受けすることになりました。

また、行政面では、昨年は高知県がん対策推進計画の策定、高知県がん対策推進協議会、がん検診の推進の会議への参加など高知県の医療行政とのかかわりは増加の一途です。

2 007 年の「こはすくん」では“やんわりと”書きましたが、現在、専任スタッフがいらないため、今はすべてにわたって私自身が関与しておりますが、ぜひとも優秀なスタッフを育成し、“形”のあるがん治療センターとしていきたいと思っております。



平成22年度 病院ニュース編集委員会委員名簿

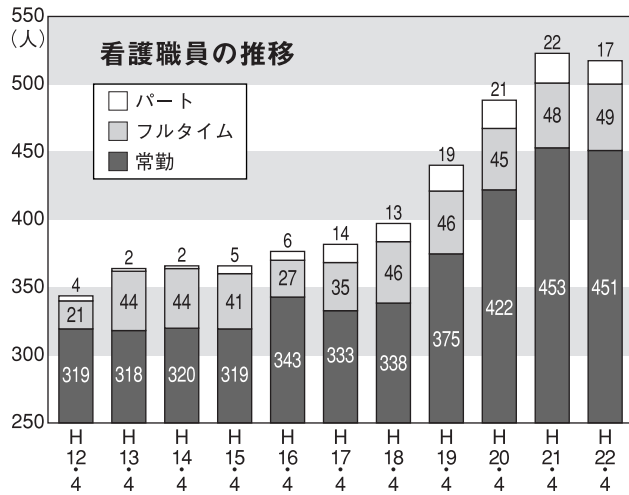
(任期:平成22年4月1日～平成23年3月31日)



- | | |
|-------------------------|---------------------------|
| ◆ 委員長 瀬尾 宏美 (総合診療部 部長) | ◆ 委員 公文 義雄 (検査部) |
| ◆ 副委員長 花崎 和弘 (外科[1] 科長) | ◆ 委員 楠瀬 伴子 (看護部 副部長) |
| ◆ 委員 久川 浩章 (小児科 講師) | ◆ 委員 西田 浩敏 (総務管理課 課長補佐) |
| ◆ 委員 谷口 慎一郎 (整形外科 講師) | ◆ 委員 都築 泰仁 (医療サービス課 課長補佐) |

職場紹介 看護部

看護部は、高知大学で一番の大所帯です。平成22年4月1日32名の新採用者を迎え、看護職員(パートタイム職員・フルタイム職員含む)総勢517名が勤務しています。もちろん、交代制勤務をしていますので、常にこの人数が病院内にいるわけではありません。10年一昔とありますが、10年前の看護職員数は344名でしたから約1.5倍になったことになります。また、看護助手は、18名から51名へと増えました。これは、7:1入院基本料算定のための看護体制、医師の業務負担軽減のための取り組み、看護師の業務拡大などの結果だと思います。



看護師が行っている業務については、ご理解いただいていることと思いますので、看護部内での活動の一部をご紹介します。看護部には、看護部の目標達成のために6つの委員会があり、様々な課題に取り組んでいます。

職場環境改善委員会	質の高い医療・看護を実現するために、働きやすい環境の整備、よい職場風土の形成が重要と考え、職場の環境改善を検討しています。
情報システム委員会	IMIS-007を利用して看護業務支援につなげられるように、また、現システムの改修要望や次期システム開発について検討しています。
記録委員会	看護記録は継続した看護の提供のために重要です。その看護記録を監査し、よりよい看護や治療のためのマニュアル見直しなどに活かすよう働きかけています。
感染管理委員会	感染管理の重要性・必要性について、標準予防策や院内感染マニュアルの遵守などを通し、看護部の感染管理に関する調査・対策・教育・研究を行っています。
現任教育委員会	大学病院として、医療に求められる様々な課題を積極的に学び、自ら考え行動できる次世代の看護師育成を目指して、年間教育計画の立案、運営、評価を行っています。研修や臨床看護研究、キャリア開発ラダーなどについても検討しています。
医療事故防止対策委員会	医療事故防止対策の実施・評価を行い、看護部全体で医療事故防止が達成できるよう働きかけています。

最後に、看護部では、「今こそマグネットホスピタルへ」をビジョンとして掲げ、各種改善に取り組んで3年目になります。看護部職員個々が自己研鑽を積み、キャリアアップを図り、組織への貢献と安全で安心な医療(看護)の提供に努めています。専門看護師や認定看護師等は各々の専門性を発揮し、院内を横断的に活動しています。また、他にも院内の専門チームの一員として活動するなど活躍の場がどんどん広範囲になってきました。今後も、職員一人ひとりが看護の質向上に努め、同時に病院経営にも貢献し、病院のよき顔になれるよう頑張りたいと思います。

診療状況

区分	外来	入院	
	延患者数	延患者数	稼働率
3月	23,329人 (新来1,550)	16,191人	86.3%
4月	21,433人 (新来1,513)	14,741人	81.2%
	院外処方せん 発行率	紹介率 (診療報酬上の紹介率)	
3月	78.3%	68.2%(58.7)	
4月	78.6%	67.6%(59.2)	

編集後記

都内の施設見学の帰り際に、「今から東京見物ですか」と言われた。そういえば最近羽田と目的地の往復ばかりである。改めて都内を見回してみると、なるほどその変貌ぶりはすさまじい。医学生や研修医にとっても魅力的であろう。しかし医療はハードの充実だけでは不十分で、ソフト面の高い質が求められる。地方の大学病院として地域のニーズを満たす高い質を追求しなければならない。本紙はその足跡を職員と学生が共有し、さらには未来像を捉えられる域をめざしたいものである。

(文責：瀬尾 宏美)